

コーパスを活用した
認知言語学

アリス・ダイグナン 著、渡辺秀樹／
大森文子／
加野まきみ／
小塚良孝 訳



A5判 306pp.
本体 2,600円
大修館書店

専門家による行き届いた翻訳書

今日、言語の理論的研究において、コーパス言語学の手法は無視できなくなっている。とくに認知言語学、談話分析、構文文法、体系文法等において、仮説の検証や論証の補強、直観の補正など、理論と実際の乖離を埋めるためにコーパスを活用した研究が増えている。Alice Deignan (2005) *Metaphor and Corpus Linguistics* の全訳である本書もその1つで、Lakoff & Johnson (1980) *Metaphors We Live By* を出発点とする概念メタファー理論を、コーパス言語学の立場から検証、補強、拡張しようとするものである。

序章と10章の結語を除き、各章のタイトルを以下に示す。第1部：第1章「概念メタファー理論と言語」、第2章「メタファーの定義」、第3章「メタファーとメトニミー」、第2部：第4章「コーパス言語学のメタファー研究」、第5章「メタファー研究の認知的、心理言語学的方法」、第6章「メタファー研究と談話分析」、第3部：第7章「メタファーの文法」、第8章「根源領域と目標領域の意味関係」、第9章「メタファーとコロケーション」。

第1部において概念メタファーの特徴、分類、定義およびメトニ

ミーの関係の問題が論じられる。第2部ではコーパス言語学の主要概念の解説の後、認知的・心理言語学的研究、談話分析におけるメタファー分析が示される。

評者にとって最も興味深かったのは第3部で、メタファー表現を構成する語句をコーパスで検索・調査することで、概念メタファーの妥当性が検討される。第7章ではコーパス調査からメタファー表現の文法パターンを抽出し、メタファー用法と字義用法に違いがあること、前者は独特のパターンを発達させ、定型表現の中に現れる傾向があることが示される。第8章では概念メタファーにおける根源領域から目標領域への写像の問題が取り扱われ、植物関連語彙のコーパス調査等により写像の一貫性が示される。第9章ではコロケーションに絞るメタファー用法と字義用法を調査し、両用法におけるコロケーションの保持について詳細な分析がなされている。著者はコーパスからメタファー表現に関わる語句を網羅的に抽出し、綿密に調査しそのパターンを探し求める。直観では気づかない、それゆえ理論からは予測のつかない言語事実が随所に示される。

本書は内容にふさわしい専門家による親切で丁寧な翻訳書である。例文には訳が添えられ、背景知識の必要な例文、本文には脚注が施されている。原書の不備や誤りについても修正と敷衍的解説が行われ、言及された先行研究は原典にあたりその異同が示されている。概念メタファーの理解を深め、コーパスに基づく意味分析の手法について学びたい人にお薦めの一冊である。

(京都外国語大学教授 赤野一郎)

EUの言語教育政策

日本の外国語教育への示唆

大谷泰照 編集代表、杉谷真佐子／
脇田博文／
橋内 武／
林 桂子／
三好康子 編



A5判 328pp.
本体 3,800円
くろしお出版

多様性と統一の言語教育

本書は2004年の第5次拡大までの欧州連合(EU)21か国の言語教育政策を踏査したもので、執筆者の大半は英語教育の専門家である。

チャーチルは第二次世界大戦直後に「ヨーロッパ合州国」の夢を語り、独仏の和解の上にひとつのヨーロッパを作り上げようと企図し、これはある意味では1949年に欧州評議会として結実した。だがその夢は、今日では27か国5億人の人口を結集し、アメリカに勝る経済力を持つに至ったEUにおいて、より実効力を持った姿としてあらわれている。そして日本のように遠く離れた土地から眺めると、国境が取り除かれ、共通通貨を持つに至ったEUは、ひとつの結束した統一国家のように思える。

確かにヨーロッパはひとつであるが、これは多様性を共通原理とする統一であり、すべてが標準化され、ひとつの規範に集約された実体ではない。その好例が言語政策であり、ヨーロッパは特定の言語を共通語とすることなく、多言語主義を共同体全体の原理としている。言語教育についてこれまでのところ、多様性という政治文化は消滅していないのだ。というのもEUは経済統合、政治統合を深化させているが、教育政策につい

